

ディズニー・マジックに隠されたアメリカ
- おとぎ話から映画になる過程を中心に -

法学部政治学科 4 年 N 組

中村太郎

はじめに

おとぎ話との比較

- 1 『白雪姫と七人の小人』(1937年)
- 2 『シンデレラ』(1950年)
- 3 『眠れる森の美女』(1959年)
- 4 三作品に見られる共通点

ディズニー・マジック 上映当時のアメリカとウォルト・ディズニー

- 1 優しく明るい映画『白雪姫と七人の小人』
- 2 玉の輿要素の強い『シンデレラ』
- 3 地味なラブストーリー『眠れる森の美女』
- 4 小括

ディズニー・マジックのその後

- 1 ディズニー・マジックがもたらす弊害
- 2 日本でのディズニー映画の上映とその影響

おわりに

はじめに

新聞、雑誌やテレビなどで、映画に関する情報を見る機会は多い。また、休日に映画館に行き、ある映画を観ることを楽しみにする人もいる。映画は、現代人にとって娯楽の一つになっている。

映画の裏には、隠されたメッセージやアメリカという国の歴史がある。具体例として、四つ挙げてみる(1)。一つ目に、1939年に上映された『風と共に去りぬ』は、アメリカ史上最大の死者を出したとされる南北戦争について南部の側からの視点で描かれている。二つ目に、戦後すぐアメリカ人がパリ・ブームに湧く中で『ローマの休日』が1953年に上映された。三つ目に、1987年に公開された『グッドモーニング、ベトナム』は泥沼化したベトナム戦争への反戦映画である。四つ目に、1993年に公開された『フィラデルフィア』では、同性愛やエイズ問題(1980年代に拡大)が描かれている。つい最近の映画でも『華氏911』といった政権風刺映画など、少なくとも世間の話題を集める映画は現実の社会状況を基にしていることがある。つまり、映画とは、政治経済を含めた社会状況が根底にあり、それを人間が直接目で鑑賞するものである。また、そこには制作者側の意図も、少なからず入っていることも忘れてはいけない。

その映画の種類の一つにアニメーション映画がある。アニメーション映画は、実写映画のように人が演じるのではなく、制作者側の作った表情や仕草を出せるキャラクターによって物語が進められる。このことは、そのキャラクターを含め映画内容など、実写映画より制作者側の意図がより反映されやすいことにつながる。

そこで、アメリカを代表するディズニー映画で、その中でもヒロインを中心とした三つの映画である、『白雪姫と七人の小人』(1937年)、『シンデレラ』(1950年)、『眠れる森の美女』(1959年)であるに注目したい(2)。なぜ、この三作品のディズニー映画なのか。日本でも有名な映画であるが、これらにはある二つの共通点があるからである。

第一に、すべてペロウ童話やグリム童話といったおとぎ話を原作に持つということである。この童話は、十九世紀以前に書かれており、上映当時アメリカでも知名度はあったと推測される。それは、映画の冒頭部分で、絵本を観衆に読み聞かせるようなイメージから始まることにも表れている。また、これらの映画はアメリカ固有のおとぎ話ではなく、ヨーロッパのおとぎ話をウォルト・ディズニー(1901-1966)が映画化し

たものである。

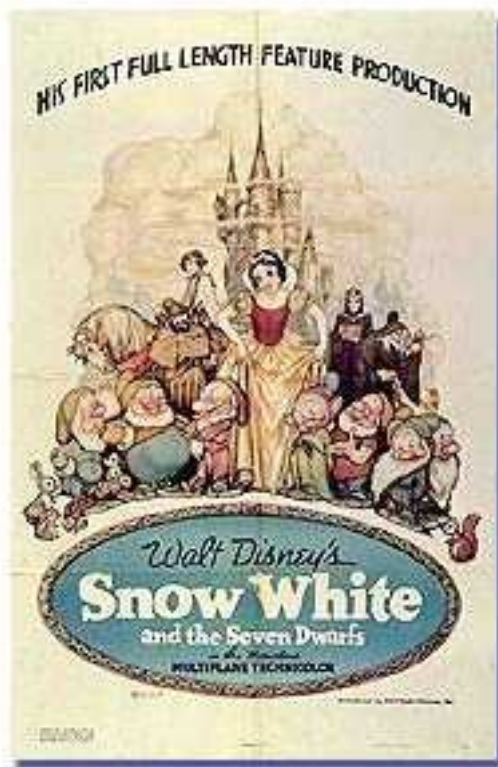
第二に、三作とも、おとぎ話を原作にしながら原作とは違った内容で映画となっていることである。また、原作には登場人物たちの容姿は、直接描かれておらず、その登場人物たちの面立ちを表現するのは、ディズニー側なのである。

以上のことから、原作と映画とに内容・描写の差が見られる三本の映画は、制作過程において上映当時のアメリカの社会状況が影響を及ぼしたという可能性がある。もし、影響を及ぼしているとすれば、その社会状況とはどういったものであったのか。また、その際、これらの映画にウォルトの考えが入ってくることや彼の生い立ちが影響してくることもある。

そこで、まず、第 2 章では、原作のおとぎ話とディズニー映画の比較をするとともに、三作品に見られる共通点について言及する。次に、第 3 章では、上映当時のアメリカの社会状況やウォルトが、映画の制作過程において、どのように関わっていたのかを検証する。第 4 章では、アメリカで大きな人気を得るまで成功したディズニー・マジックがもたらした弊害と、ディズニー映画が日本のアニメ界に及ぼした影響について論じる。

おとぎ話との比較

1 『白雪姫と七人の小人』(1937 年)



ディズニー映画『白雪姫と七人の小人』は、グリム童話『白雪姫』が原作となっている(3)。現在、ほとんどの子供向けの絵本で見られる『白雪姫』の内容は、前者の内容となっている。しかし、ディズニー映画『白雪姫と七人の小人』とグリム童話『白雪姫』では異なる内容が多い。

ディズニー映画の内容をまとめると以下ようになる。

白雪姫の美しさに妬む継母に殺されそうになった白雪姫は、殺そうとした猟師に助けられて森へ逃げる。森の中で小動物達と出会い、小人の家に着く。率先して掃除や料理をして七人の個性豊かな小人達と過ごす。猟師が持ってきた心臓が偽物と気づき、魔法の力でリンゴ売りの老婆に化けた継母に毒リンゴを食べさせられる。その後、継母は小人達に追い詰められ、崖の上から落雷によって死ぬが、ガラスの棺に納められた白雪姫は王子(冒頭にも登場し、白雪姫と歌を交わす)のキスによって目覚め、王子とともにお城へ向かう。

以上がディズニー映画『白雪姫と七人の小人』の大まかな内容であるが、原作のグリム童話『白雪姫』は、どのような内容になっているのだろうか。

父王が迎えた美しい継母に生まれた七歳の美しい白雪姫は殺されそうになるが、殺そうとした猟師に助命嘆願し森へ逃げる。猟師が持ってきた肺と肝臓を白雪姫のもの

と思った継母はたいらげる。小人の家に着いた白雪姫は、空腹やのどの渇きから家の中にあった食べ物や酒を飲食する。小人達に家事全般をすることを条件に家に泊めてもらえることを提案された白雪姫は快く応じる。継母は二回白雪姫を殺そうとするが、小人達によって阻止される。小人達に用心するようにと注意を受けた白雪姫だが、継母の持ってきた毒リンゴにより殺されてしまう。小人達はガラスの柩に白雪姫を納め、動物たちと死を悲しむ。偶然王子が白雪姫を見つけ、小人達に譲ってもらう。柩ごとお城へ持って行く途中に、柩がかたむくと同時にリンゴの芯を出し蘇生した白雪姫は、王子から求愛され応じる。王子と白雪姫のお祝いの宴会に継母も招待されて行くが、白雪姫の前で殺されてしまう。

以上が、グリム童話『白雪姫』の大まかな内容になるが、純粋なハッピーエンドを迎えるディズニー映画とはやはり異なる。では、どこが同じで、どこが違うのか。ディズニー映画『白雪姫と七人の小人』とグリム童話『白雪姫』を比較していきたい。

まず、両者の共通点として主に三点挙げられる。

第一に、白雪姫の容姿の描かれ方である。

グリム童話

この雪のように白くて、この血のように赤くて、それからこの窓枠の黒檀のように黒い髪の毛の子ども

ディズニー映画⁽⁴⁾

“Lips red as the rose. Hair black as ebony. Skin white as snow.”（「唇はバラのように赤い。髪は黒檀のように黒い。肌は雪のように白い」）

グリム童話では、冒頭部分で白雪姫の母親が望む容姿について語られている。ディズニー映画では、魔法の鏡がその容姿を語っている。唇の赤さが「血」から「バラ」には変わったけれども、大方同じ内容である。

第二に、嫉妬深い継母の性格や魔法の鏡の存在である。

グリム童話

お妃は、不思議な鏡をひとつ持っていました。…「壁にかかった鏡よ、鏡よ、国じ

ゆうで一番のきりょうよし、それはいったい誰かしら」...(筆者補：白雪姫は)七歳になったときには、澄み渡った日のように美しく、お妃よりもずっと美しい姫になりました...お妃の胸のうちに、妬み心と、高慢ちきな気持ちとが、雑草のように生い茂り

ディズニー映画

Her vain and wicked Stepmother the Queen feared that some day Snow White's beauty would surpass her own. ...Snow White was safe from the Queen's cruel jealousy. (うぬぼれが強く腹黒い継母は、白雪姫が自分より美しくなることを恐れていた。...(筆者補：魔法の鏡に自分が一番美しいと言われている間は)白雪姫に嫉妬の矛先は向けられませんでした。)

“Magic Mirror on the wall, who is the fairest one of all?” (「魔法の鏡よ、一番美しいのは誰?)

お妃の性格や美への執着は、両者ともに同じである。世代交代は生物世界の中での理であり、それは同時に美の衰えも意味する。その衰えや相手(継娘)に越されていくことをお妃は否定する。これは、これから続く物語が白雪姫と継母の美をめぐる対立構造となっていることを暗示する(5)。

第三に、小人達が白雪姫へのお妃からの仕打ちに対する心配することである。

グリム童話

(筆者補：小人たちは白雪姫に)「物売りのばあさんは、...あの罰あたりのお妃...気をつけるんだよ。どんな人間も入れてはならんだ」

ディズニー映画

“The old Queen's a sly one. Full of witchcraft. So beware of strangers.” (あの老けた王妃はずる賢い。魔法でいっぱいだ。だから、知らない人に気をつけて。)

白雪姫に対する心配は、両作品とも同じであるが、ディズニー映画では、先生(小人の一人)が「あの老けた王妃」というように、「王妃=老」と「白雪姫=若」という

両者の対立構造が明確に描かれている。

次に、グリム童話とディズニー映画の相違点として主に九点挙げられる。以下の表に記した相違点だが、九点目の継母の最期について確認しておきたい。

グリム童話でもディズニー映画でも継母の最期は死で終わっている（ただ、ディズニー映画では崖から落ちるのみで、二羽の禿鷲が継母の死を間接的に表している）。グリム童話の継母の最期は残酷さが強い。

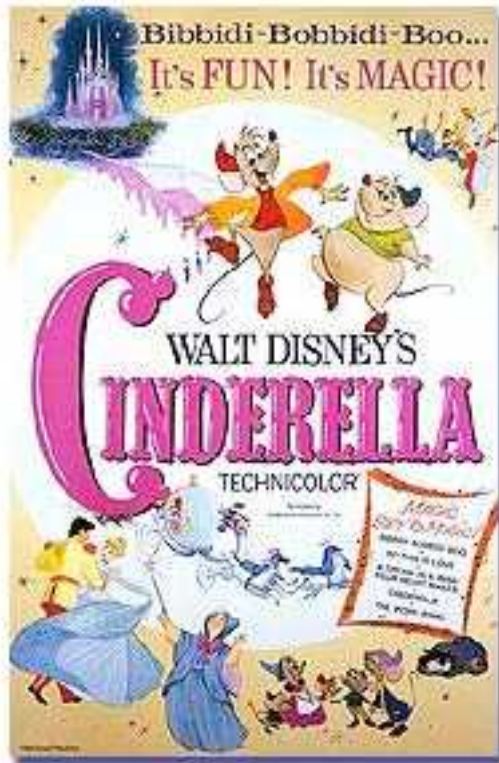
グリム童話

もう鉄の上靴は、炭火の上に置いてあり...お妃は、真っ赤に焼けた鉄の上靴をはいて、いつまでも、いつまでも床に倒れて死んでしまうまで踊りつづけねばならなかった

この残酷な方法は、中世ヨーロッパで流行した魔女裁判で実際に使われた拷問道具として知られている⁽⁶⁾。十九世紀のドイツで出版されたグリム童話では、この事実も身近に感じられるが、二十世紀のアメリカにおいては身近に感じられない。さらに、映画が持つ娯楽の性質や、直接観客が目で観賞するものであることから、子供にも安心して観られるように、この部分は修正されたと思われる⁽⁷⁾。

グリム童話『白雪姫』	比較対象	ディズニー映画 『白雪姫と七人の小人』
有	父親の有無	無
毒リンゴによって死んだ後	王子との出会い	冒頭部分
狩人に助命	狩人からの逃げ方	狩人から逃がされる
白雪姫の死を悲しむ場面の み登場	動物	白雪姫と関わる場面が多い
小人から出された交換条件	家事	自ら率先して家事をこなす
全員強気な発言が多い	小人達の性格	一人一人が独立した性格を持ち、白 雪姫に対して優しい
三回	継母による白雪姫の 殺害計画数	一回
柩が揺れた瞬間に毒リンゴ を吐き出す	白雪姫の蘇生方法	王子のキス
鉄の上靴を履かされて死ぬ まで踊らされる	継母の最期	崖から落ちて死ぬ

2 『シンデレラ』(1950年)



ディズニー映画『シンデレラ』の原作となるのが、ペロー童話『サンドリヨン、あるいは、小さなガラスの靴』である(8)。『白雪姫』同様に、現在子供向け絵本で見られる『シンデレラ』の内容は前者に近いものが多い。ディズニー映画『シンデレラ』とペロー童話『サンドリヨン、あるいは、小さなガラスの靴』は、内容が異なる。

紳士である父親が死ぬと、シンデレラは継母と二人の継娘にいじめられながらも、小鳥やネズミなど小動物達に愛されて過ごしている。帰国する王子の結婚相手を見つける目的で舞踏会が開かれることになり、シンデレラの家にも招待状が届く。しかし、シンデレラは継母達に阻まれるが、妖精によってガラスの靴やカボチャの馬車などが用意され、無事舞踏会に行く。そこで、王子がシンデレラに一目惚れしお互いに恋の歌を交わすが、魔法の期限である深夜十二時となり、シンデレラはガラスの靴一つを置いて去ってしまう。靴の持ち主を探すようになり、シンデレラも王子と結婚できると喜ぶが、継母によって部屋に閉じこめられてしまう。しかし、後に小動物達に助けられ、無事王子と結婚する。

以上が、ディズニー映画『シンデレラ』の内容であるが、原作ペロー童話『サンド

リヨン、あるいは、小さなガラスの靴』はどのような内容になっているのだろうか。

心優しい貴族の娘であるサンドリヨンは、継母から妬まれていじめられる。父親は継母の尻に敷かれている状況である。王子が舞踏会を開催し、継娘を含め身分の高い人たちが招待される。みんなが舞踏会へ出かけた後、名付け親である仙女に、サンドリヨンは助けられて無事舞踏会へ行き、王子と出会う。十二時までの魔法だったため、途中で帰ってくるが、仙女に頼んで次の日も、前日より豪華な衣装を用意してもらい、舞踏会に出席する。十二時となり、サンドリヨンはガラスの靴を一つ落として去るが、持ち主の搜索で無事見付き、王子と結婚することになる。その際、意地悪な行いをしたことに対して許しを請うた継娘達を、サンドリヨンは心から許し、彼女達を宮廷に住まわせ、同日に貴族と結婚させてあげる。

以上が、ペロー童話『サンドリヨン、あるいは、小さなガラスの靴』の大まかな内容になるが、ディズニー映画『シンデレラ』と設定状況など共通する部分も多い一方で、異なる部分もある。では、どこが同じで、どこが違うのか。ペロー童話とディズニー映画とで比較していきたい。ただし、ペロー童話の著者ペローが生きたのは、十八世紀のヴェルサイユ宮殿を中心にブルボン王家が栄えたフランスである。そのことも考慮に入れると、宮廷描写など当時のフランス色が強いことになる。

まず、両者の共通する点は主に三点ある。

第一に、物語の雰囲気フランスを想起させることである。

ペロー童話

一流の店のつけぼくろを買いに走らせもしました。

お姫様方、ついで公女様方、それから宮廷の人たちが順番に靴をはいてみる

ディズニー映画⁽⁹⁾

Once upon a time, in a faraway land, there was a tiny kingdom. ... Here, in a stately chateau, there lived a widowed gentleman, and his little daughter, Cinderella. (昔々、遠い所に小さな王国がありました。その国のある立派なお屋敷に、妻を亡くした紳士とその娘のシンデレラが住んでいました。)

アメリカの政治形態は、独立戦争以降大統領制を採用している。もちろん君主もい

なければ、王女や姫などもいない(王国ではない)。フランスのような貴族制も(奴隷制はあったが)ない。また、映画の冒頭で出てくるお城も、アメリカには元々なく、ヨーロッパのお城がモデルとされている。また「chateau」などのフランス語を使っているところにも、フランス色が伺える。

ただ、ペロー童話の作者シャルル・ペローは、太陽王と言われたルイ十四世が中心となる絶対王政下のフランスで生きた人物である。その童話に舞踏会、髪型やつげぼくろなど当時のヴェルサイユの宮廷文化が反映されていてもおかしくない。ディズニー映画では書かれていないつげぼくろも、当時のフランスでは専門店まで存在したのである(10)。さらに、ペローが生きた時代の文化にも裏付けされる。片木智年氏の『ペロー童話のヒロインたち』には以下のように述べられている(抜粋)(11)。

ペローが生きたフランス古典主義文化はきわめて規範的な美学に基づいた価値観を持っていた。古典主義美学自体が規範的美学であると言い換えても良い。その原則を支える大きな柱の一つにビヤンセアンスと呼ばれるものがあり、「礼節」としばしば訳される。これは、ある作品中において登場人物はその身分や性格に相応しい行動が要求されるという内的なビヤンセアンス…。

確かに、将来お妃となるサンドリヨンの言動は、ペロー童話でもディズニー映画でも慎ましい。このペローの生きた時代の文化をウォルトが意識したかは不明だが、映画の冒頭でのコーラスに注目したい。

ディズニー映画

You wear an air of queenly grace (女王のような気品をまとっている)

Anyone can see a throne (誰にでも分かるはず)

Would be your proper place (王座こそがあなたにふさわしい場所)

まさに映画の冒頭のコーラスで述べられているように、これから始まる映画の中でシンデレラの言動を想起させ、ペロー童話と似通っている。

第二に、仙女の存在、魔法の効果が有限であることとカボチャの馬車やガラスの靴があることである。

ペロー童話

(筆者補：みんなが舞踏会へ出かけた後、サンドリヨンが泣き出すと)名づけ親である仙女が現れ、涙まみれになっているサンドリヨンを見ると、どうしたのかと尋ねました。(筆者補：仙女はカボチャを馬車に、六匹のはつかねずみを馬に、太ったねずみを御者、六匹のとかげを従者にした)...魔法の杖でサンドリヨンに触れただけで、サンドリヨンの服は、たちまち、宝石をぬいとめた、金糸銀糸の布でできた服に...この世に二つとない、美しいガラスの靴をくれました...仙女は、サンドリヨンに、どんなことがあっても、夜中の十二時過ぎまでいてはいけない、と注意しました

ディズニー映画

“Your fairy godmother? Of course.” (あなたを助ける妖精かって？そのとおり。)

“I'd say the first thing you need is a, a pumpkin.” (まず必要なのは、かぼちゃかしらね。)

“Oh, it's a beautiful dress. Did you ever see such a beautiful dress? And look! Glass slippers!” (まあ、美しいドレスだわ。こんなきれいなドレスを見たことある？それに見て！ガラスの靴よ！)

“But like all dreams, well, I'm afraid this can't last forever. ... On the stroke of twelve, the spell will be broken.” (でも、すべての夢と同じように残念だけど、この魔法も永遠にはつづかないの。時計の鐘が12時を打ったら、魔法は解けてしまうの。)

両作品ともに、妖精が魔法の力によってサンドリヨン(シンデレラ)を助けている。第三に、継母や二人の継娘の存在と彼女らにいじめられるという設定があること、である。

ペロー童話

奥方は、誰も見たことがないほど高慢で、気位の高い人でした。...(筆者補：継娘二人は)あらゆる点で、母親にそっくり...(筆者補：継母は)娘のいい性質が、自分の娘たちをよけいに厭わしいものに見せるので、いらいらしていました。継母は、家中

の一番汚い仕事を、この娘におしつけました。

ディズニー映画

Cold, cruel and bitterly jealous of Cinderella's charm and beauty, ... Cinderella was abused, humiliated, and finally forced to become a servant in her own house.

(継母は、冷たく残酷で、シンデレラの魅力と美しさにひどく嫉妬しました。...シンデレラは虐げられ、見下され、ついには召使いにさせられてしまいました。)

ここで、注目したいのが、ペロー童話では、継母がサンドリヨンを嫌う理由が自分の娘たちの性格が余計に悪く見えるからという理由だったのに対して、ディズニー映画ではシンデレラの魅力と美しさへの嫉妬によるものなのである。

前説のグリム童話『白雪姫』とディズニー映画『白雪姫と七人の小人』の共通点の比較でも述べたように、美に関する争いが「シンデレラ 継母(や継娘たち)」という構造で描かれている。

次に、両者の相違点は主に八点ある。それらを以下の表にまとめてみた。前説の相違点の比較でも述べたことと、同じところがある。それは、父親がいない(シンデレラの場合は、幼い頃に死ぬ)ということと、舞踏会に行く回数を一回に変更するなど単純でわかりやすいシナリオにしていることである(ディズニー映画『白雪姫と七人のこびと』でも、白雪姫が殺されかける回数は一回と短縮されている)。

ペロ-童話『サンドリヨン、あるいは、小さなガラスの靴』	比較対象	ディズニー映画『シンデレラ』
物語の中では、ずっと継母の尻に敷かれている存在	父親	シンデレラが幼い時に死ぬ
あまり触れられていない	継娘の容姿	見るからに醜い
魔法で馬や従者になるときだけ登場	動物	個性的な動物が多い
舞踏会を開く存在として描かれる	王子	どこから帰ってくる設定
二回	舞踏会の回数	一回
書かれていない	舞踏会の目的	結婚相手を探す
継娘が履けないのを見て自ら申し出る	使者が持ってきた靴を履くまで	継母によって部屋に閉じ込められる
サンドリヨンから許され、貴族と結婚	継娘のその後	描かれていない

ところで、グリム童話にも『灰かぶり』という童話が存在し、こちらもディズニー映画『シンデレラ』の原作ではないかという意見も出てくるかもしれない。しかし、四つの理由から、今回の論文ではペロー童話の方を原作として捉える(12)。

第一に、舞踏会に行けない灰かぶりを助けるのは、はしばみの木であり仙女(妖精)ではないことである。そして、魔法でもないので、「十二時まで」といった制限がないことである。

グリム童話

(筆者補：みんなが舞踏会に出かけると)灰かぶりは、はしばみの木のしたにあるお母さんのお墓へ行き...いつもの鳥が灰かぶりに金と銀の服を投げおろしてくれました。それから絹と銀で刺繍した靴も。

第二に、舞踏会に出かける回数が三回と、ペロー童話の二回よりも多いということである。

第三に、灰かぶりの靴がガラスの靴ではないということである。

グリム童話

(筆者補：三回目の舞踏会で履く)靴はすっかり金でできていました。...「この金の靴が足にぴったり合う人を、ぼくは妻にするつもりだ。」

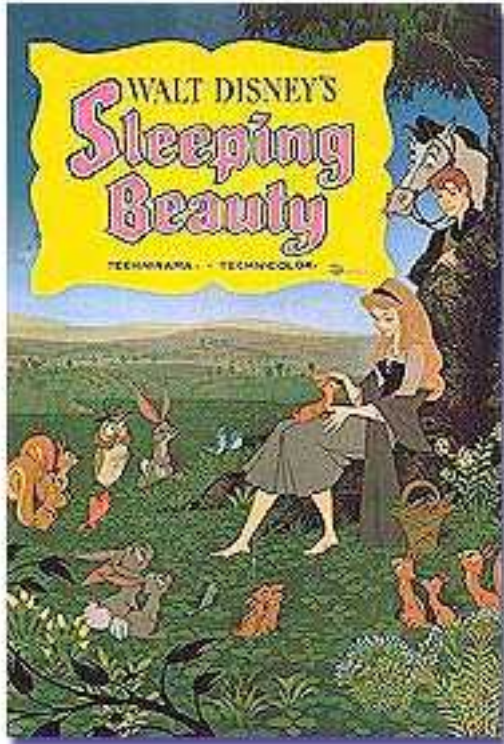
第四に、残酷な場面が多く、結末も残酷であることである。

グリム童話

(筆者補：灰かぶりの靴を履こうとした娘の一人は)親指を切り落として、足を靴のなかへおしこみました。...(筆者補：もう一人の娘も)かかとをすこし切り落とし、足を靴のなかへおしこみました。...花嫁と花婿が教会へ行くとき...二羽の鳩が飛んできて、それぞれ姉たちの片方の目をつつきだしました。式がすんで、花嫁と花婿が教会から出てきたとき...二羽の鳩が飛んできて、それぞれもう一方の目をつつきだしました。

以上のように、ディズニー映画の内容描写に近いのは、ペロー童話の方であるため、こちらを原作と捉える(13)。

3 『眠れる森の美女』(1959年)



ディズニー映画『眠れる森の美女』の原作は、グリム童話『いばら姫』である。

ウォルトが手がけたヒロイン映画の最後だが、日本でも前者の内容が浸透してきていると感じる。やはり、両者では内容が異なるのである。

初めに、ディズニー映画『眠れる森の美女』の大まかな内容は、以下のようである。

ある国で王様とお妃に待望の子供が産まれてオーロラ姫と名付けられる。その祝宴で三人の妖精が招かれ、二人の妖精から各々美や歌声を授かる。招かれなかった悪い妖精(魔女)から十六歳の誕生日に糸車の針に指を指して死ぬと言われる。しかし、残りの一人の妖精に「死ぬのではなく眠るだけで、恋人のキスで目を覚ます」と予言される。このとき、隣国のフィリップ王子とは許嫁とされる。オーロラ姫は森の中で、妖精達に育てられ、十六歳の誕生日に自分の出自を知らされ、お城に戻る。しかし、悪い妖精(魔女)によってオーロラ姫は糸車の針に指を指して死んでしまうが、三人

の妖精によってお城全体が眠りに包まれることになる。悪い妖精（魔女）によって捕らわれていたフィリップ王子は、三人の妖精とオーロラ姫の眠るお城へ向かう。その途中の災難もくぐり抜け、ドラゴンに化けた悪い妖精（魔女）との戦いにも勝ち、オーロラ姫とキスをし、オーロラ姫も目が覚めお城全体も起き始める。そしてオーロラ姫は両親の王様とお妃と感動の再会を果たし、最後に王子とダンスをする。

綺麗にハッピーエンドで終わるようになっているディズニー映画『眠れる森の美女』だが、一方のグリム童話『いばら姫』はどのような内容なのだろうか。

子供の誕生を望む王様とお妃に、蛙の予言通り姫が生まれる。王様は喜び、盛大な祝宴を開くとともに、巫女も呼ぶ。王様の国には十三人の巫女がいるが、ご馳走の皿の数が十二枚しかないので、一人だけ招かれない。招かれた巫女達からは、徳や富など姫に贈られる。十一人の巫女が呪文を唱え終わると、招かれなかった巫女が来て、「十五歳になったら、糸まき棒が突き刺さって死ぬ」と呪文を唱え帰ってしまう。最後に残された巫女は「死ぬのではなく百年眠るだけ」と唱え、悪い呪文を弱める。巫女達の贈り物はすべて実り、十五歳になった姫は、王様とお妃が留守のときに古い塔へ入る。その小さな部屋で糸巻き棒を使って麻糸を紡ぐ老婆に出会い、糸巻き棒に手を触れた途端、魔法の呪文がきいて眠りについてしまう。姫の眠りは王様とお妃も含めてお城全体に拡がり、お城は伸びてきたいばらで包み込まれる。「美しい眠りのいばら姫」と姫は言われ、多くの王子達が会いに来るが、いばらで中へ入れないまま死んでしまう。百年たって、ある王子がくるといばらの生け垣は割れ、王子が古い塔の小さな部屋に入ると、姫の美しさに思わず接吻する。姫は目を覚まし、お城も起き始め、王子と姫は結婚して幸せに暮らす。

以上がグリム童話『いばら姫』の内容となるが、ディズニー映画『眠れる森の美女』との共通点と相違点を挙げてみる。

まず共通点としては、主に六点挙げられる。

第一に、姫が王様とお妃の待望の子であることである。

グリム童話⁽¹⁴⁾

王さまとお妃とがおりました。ふたりは、くる日もくる日も、「ああ、どうにか子どもがひとりほしいものだが……」と、話しあっていましたが、いっこうに子どもに恵まれませんでした。

ディズニー映画 (15)

In a far away land long ago, lived King and his fair Queen. Many years had they longed for a child (昔々の遠い国のお話です。その国の王様とお妃様は、長い間赤ちゃんの誕生を待ち望んでおりました。)

第二に、姫が十五、六歳の時に糸巻き棒が指に刺さって死ぬことが予言されることと、それを防ぐ妖精(グリム童話では巫女)がいることや、国中の糸巻き棒を燃やす命令を出すことである。

グリム童話

(筆者補：招かれなかった巫女は)「姫はな、十五歳になったら、糸まき棒が突き刺さって、死んじゃうんだよ」...まだお祝いのあいさつをすませていなかった十二番目の巫女が、まえに進み出て、言いました。「お姫さまは、お亡くなりになるのではありません。百年という深い眠りにつかれるだけのことでございます」...(筆者補：王さまは)国じゅうの糸まき棒を、ひとつ残らず焼きはらうよう、命令を出した

ディズニー映画

“But before the sun sets on her 16th birthday, she shall prick her finger on the spindle of a spinning wheel and die!”... “Sweet princess, if through this wicked witch’s trick a spindle should your finger prick,... Not in death, but just in sleep. The fateful prophecy you’ll keep. And from this slumber you shall wake, when true love’s kiss the spell shall break”... But King Stefan, still fearful of his daughter’s life, did then and there decree that every spinning wheel in the kingdom should on that very day be burned. So it was done. ((筆者補：マレフィセントが呪文したことは)「しかし、16歳の誕生日の日が沈むまでに、糸車の針で指をさすだろう。そして、死ぬ！」...(筆者補：三番目の贈り物にメリーウェザーは)「かわいいお姫さま、もしもあの魔女の呪い通りに、糸車の針で指をさしても、...死ぬのではなく、しばらくの間深い眠りにつくだけ。そして、心から愛する人のキスで呪いは解けて眠りから覚めるのです」...しかし、ステファン王は、娘の身を

案じ、すぐさま命令を出して国中にある糸車を集め、一つ残らず燃やしました。すべての糸車を。)

後述することだが、姫が眠る期間の予言は、グリム童話とディズニー映画とは異なっており、「愛する人からのキス」といった要素が付け加わっていることに注意したい。

第三に、姫の眠りとともに王さまとお妃も含め城全体が眠ってしまうことである。

第四に、出てくるタイミングは異なるが、城の周りにいばらが生える設定であることである。グリム童話では、城全体が眠りにつくといばらが伸び始め城を包むが、ディズニー映画では、悪い妖精（魔女）が王子の行方を遮ろうとしていばらが生え始める。

第五に、王子のキスで姫が眠りから覚め、城全体も起き始める進行になっていることである。グリム童話の以下の様子は、ディズニー映画では、台詞こそないが、同じ雰囲気醸し出している。

グリム童話

王子は...いばら姫に接吻をしました。すると、いばら姫は、目をぱっちりあけました。...そして、にっこりと王子を見つめました

第六に、物語の舞台が中世を想起させることである。十九世紀に成立したグリム童話で「むかしむかし...」というようならば中世を想起できるが、ディズニー映画でもそれが具体的に出ている台詞があるのである。それは、フィリップ王子の台詞にある。

ディズニー映画

“ This is the 14th century. ”(ここは14世紀ですよ。)

次に相違点として、主に六点挙げられるので、それを表にまとめてみた。

そうすると、気付く点がある。それは、ディズニー映画『白雪姫と七人の小人』と『シンデレラ』の箇所でも述べてきたことだが、招待される妖精の数が三人と原作に比べ減っていることや、姫が眠りにつく期間をほんのわずかのよう演出することで、

わかりやすい内容になっていると同時に、それぞれの妖精を個性豊かに描けるようになっている。

グリム童話 『いばら姫』	比較対象	ディズニー映画 『眠れる森の美女』
十二人	招待される妖精(巫女)の人数と各々の個性	三人
偶然出会う	王子と姫との関係	許嫁
無し	妖精たちの姫への養育	有り
無し	小動物たちの描写	有り
百年	姫が眠りにつく期間	短時間の間で事は進行
無し	悪い妖精(死ぬと予言した巫女)と王子との戦い	有り

ところで、ペロー童話にも『眠りの森の美女』という童話が存在し、ディズニー映画の原作に捉えられるかもしれない。しかし、以下の三つの理由から、グリム童話の方がディズニー映画の原作に近いと考える。

第一に、お城全体が眠りにつく時、王と王妃は眠らずどこかに行ってしまうという設定になっていることである。

ペロー童話

王さまと王妃さまは、眠ったままのかわいい王女さまに、おわかれのキスをして、お城から出ていかれました。

第二に、王子のキスで目覚め王女が、まるで予期していたかのような言葉を発することである。

ペロー童話

「あなたでしたの？王子さま、ずいぶんお待ちしましたわ。」

第三に、後日談(王子と王女の結婚後の話)があることである。

以上三つの理由から、グリム童話の方が、原作として近い存在と位置づける。

共通点が、他の二作品に比べて多い一方で、相違点も存在する。次章では、共通点に留意しながらも、相違点を対象に検討していく。

4 三作品に見られる共通点

上記のディズニー映画三作品には、三つの共通点が見られる。

第一に、ヒロインの描かれ方で、全員若く美しいということである。白雪姫は原作でも七歳とあったように少し幼くかわいい感じがするが、シンデレラとオーロラ姫は十五歳前後で美しく描かれている。それと対をなすかのように、継母や継娘など悪役は四十～五十代くらいの様相で描かれている傾向にある。さらに『シンデレラ』に顕著なのは、継娘達が原作では言及されていないほど明らかに醜く描かれていることである。

第二に、ヒロインを助ける存在がいて、どれも小さいことである。ヒロインの周りには、リスやネズミなど小動物が集まり、小人や妖精も小太りで老けた感じになっている。

これら二つの共通点も、原作のおとぎ話だけでは想像することはできず、ウォルトら制作側が練ったものに違いない。このことも、何か作っていく上で必要だったのか検証したい。

ディズニー・マジック 上映当時のアメリカとウォルト・ディズニー

1 優しく明るい映画『白雪姫と七人の小人』

第 1 章 1 節で述べたように、本来のグリム童話『白雪姫』は必ずしも、明るくハッピーエンドの内容ではなかった。しかし、ディズニー映画では逆になっている。

ディズニー映画『白雪姫』が、上映された 1937 年のアメリカは、どのような状況だったのであろうか。当時のアメリカの特徴として三点あげられる。

第一に、世界恐慌(1929 年 1933 年)の後遺症がまだ残っているということである。1937 年当時のアメリカの失業率は 14.3%と高水準であった。2010 年 12 月現在の失業率が 9.4%とリーマンショックによる不況の最中であるのに高水準であるのだから、当時の経済状況が悪かったという予想はつく(16)。

第二に、恐慌によって女性労働者が解雇となり、家庭に入っていたことである。1937 年よりも前、1920 年代は、女性参政権が認められたのを始め、良妻賢母といった既成の価値観からの脱却を図る女性も存在した。しかし、その一方では、プロテスタンティズムに基づく伝統的な価値観への回帰も反動として強くなっていたことが指摘できる(17)。

第三に、世界秩序が不安定な時期に突入していたことである。アジアでは満州事変が起こり(1931 年)、中国では国共内戦、ソ連の増強やヒトラーやムッソリーニといった独裁政権の誕生などが起きていたのである。しかし、その間、アメリカは、自国の経済再建を行うのに必死であり、世界で起きていることに対処していく余裕はなかった。1935 年の中立法にも表れているように、世界の政治状況の悪化に伴って戦争に巻き込まれて経済再建が頓挫してしまうのではいかという不安の声が国内でも起きて

いた(18)。

以上のように、アメリカを取り巻く情勢は、1920年代までのように経済状況が明るい時代ではなく、内外を問わず暗い時代であった。アメリカ国民も、喪失感や虚無感、不安を感じていた。

一方、ウォルトはどうだったのであろうか。注目したい点が六つある。

第一に、ウォルトが『白雪姫』を選んだ理由である。ウォルトは『白雪姫』の内容について以下のように述べた(19)。

心優しい小人がいるだろ。悪役もいる。王子様もいれば、かわいい女の子もいる。ロマンスがあるんだ。だから、申し分のないストーリーだと考えた

ここでいう悪役とは、まさに白雪姫の継母である。「善」と「悪」、それに加わる補助者が付き、さらに恋という要素が使えるとウォルトは考えたのである。

第二に、「善」と「悪」といったアレゴリーを明確に区別したことである。つまり、「善 = 白雪姫(それを守る、王子様、七人の小人、小動物たち)」と「悪 = 継母(、カラス)」といった対立構図を基軸としていることである。「善」の代表格である白雪姫は、もちろん悪いことも汚いこともしない、善人役を極めているからこそ、守るべき存在として捉えられ、映画でも狩人が殺人計画を自ら止め、許しを乞うのである。その一方で、「悪」の代表格である継母は良いことすらせず、悪人役を極めている。そして、「小」人、「小」動物といった、端から見ると弱いものが善人役の白雪姫を助けることで、善人の白雪姫が悪から追われていて、その悪から解放され王子様と一緒にいるといった設定をより際立たせることで、観客側からみれば、わかりやすいロマンティックな展開となるのである。さらに、「善」側に使われる配色や音響は明るいのに対して、「悪」側に使われる配色や音響は暗いのもそれを助長している要因である。

第三に、父親の存在を抹消したことである。グリム童話『白雪姫』では父親は描かれているが、ディズニー映画では何一つ言及されていない。ただ、グリム童話自体、再婚を果たした後の父親はいないも同然の描かれ方であることを注意したい(20)。原作では影の薄かった父親を、逆に言及しないことで身内では、白雪姫とその美しさを妬む継母だけという図式にすることで、白雪姫を守る身内がないことを強調できる。また父親に限らず、王子の影も薄い。これは、白雪姫らヒロイン側に重点が置かれて

いた(21)ことや、王子にまで個性を与え登場回数を多くすると時間が長くなるために却下されたためである(22)。

第四に、完全なラブストーリーに変えたことである。原作での王子との出会いは、白雪姫が毒リンゴを食べた後であり、白雪姫の蘇生方法も柩がぐらついたからという理由である。

グリム童話

王子が、森のなかに迷いこみ...白雪姫を見た...「あの柩をぼくにゆずってください。...柩をぼくに贈ってください。...白雪姫を、ぼくの宝物として...」...柩がぐらっと揺れた拍子に、...毒林檎の芯が、のどから飛び出し...白雪姫は目をぱちりとあけました「ぼくは、この世のなによりも、きみが好き...きみをぼくの妃にしよう」それを聞くと、白雪姫は王子が好きになり

以上のように、冒頭部分で白雪姫と歌を交わすシーンを出して、最後に再会を果たすというシーンの展開にしたのである。

第五に、白雪姫の母性が強調されるシーンを作ったことである。ディズニー映画で白雪姫が初めて小人の家に行って、掃除を始める場面でこのような台詞がある。

ディズニー映画

Maybe they have no mother. Then, they're orphans. That's too bad. ...We'll clean the house and surprise them. (お母さんはいないのかも。じゃみなしごなのね。お気の毒ね。...部屋を掃除して、みんなを驚かせましょう。)

自らの意思で掃除を始め、しかも歌を歌いながら楽しんで行っている。また、小人の家に置いてもらう代わりに、家政を切り盛りすると自ら申し出ている。しかし、これは、原作の様子と違う。

グリム童話

「(筆者補：小人は)もし、あんたが、わたらの家の世話をしてくれて、お料理をつくったり、ベッドをつくったり、それに洗濯をしたり、針仕事や編みものをして...

そのうえ、なにからなにまで、きれいに、きちんと片付けてくれるなら...わたしのところにいたっていいんだよ」「(筆者補：白雪姫は) ええ、いいですよ。喜んでしますとも」

自らが、母親的役割を担うヒロインになっていたのである。

第六に、子どもにも見せやすい映画にしたことである。第 4 章でも述べたように、残酷なシーンを消したり、白雪姫の殺されかける回数を一回にしたりなどして複雑さを消したのである。さらに、七人の小人全員に名前と個性を与えていることである。それぞれの名前は、てれすけ、おこりんぼ、など性格を表す名前にした。また、顔もサンタクロースに似させることで親近感を持たせたのである。『白雪姫と七人の小人』とあるように、彼ら小人も映画では大きな役割を担う存在として位置づけられていたのである(23)。

以上のように、当時のアメリカの社会状況と、ウォルトらの関係を鑑みると、暗い時代だったからこそ、この白雪姫が生まれたのである。みすばらしい服を着せられて下働きをさせられても負けず、明るく振る舞い、小人の家では母性を全開する。おそらく、世界恐慌で不運にある自分たちを、この不運にある白雪姫に重ねて見ていたのだろう。これらの描写は、おかだみえこ氏の言葉を借りると、ヨーロッパ民話のお姫さまではなく、アメリカの、それも開拓時代の女性、つまり<大草原の小さな家>にふさわしい若い女性、そのものなのである(24)。

もう二つ、この時代アメリカで大ヒットする理由がある。それは、映画そのものの性格である。このディズニー映画は、長編カラーで成り立っている。当時、短編のアニメーション映画はあったものの、長編は観客も慣れていないという理由で金銭的な理由からも、周囲からは映画は大反対されていた。しかし、この短編を超え成功するためにも、ウォルトは説得し続けたのである。さらに、映画を作るにあたっては、実写映画にも負けられないように、本物のモデルを使って人の動きを取り入れ、アニメでも本物の人が動いている感覚を出したのである。カラー映像がそれほど普及していない時代、白雪姫の豊富な色使いは、観る人に新鮮な気持ちを与えた(25)。

色鮮やかな場面、まるでアニメではなく本物の人のような動き、それらは同時代の世界を見ても、なし得ない技術をウォルトはなし得たのである。世界が混沌とした状況下にありながら、アメリカの(文化・技術)力を世界に知らしめるきっかけとなっ

たのである。

2 玉の輿要素の強い『シンデレラ』

第 2 章第 2 節で述べたように、ペロー童話『サンドリヨン、あるいは、小さなガラスの靴』とディズニー映画『シンデレラ』とは、相違点がある。この節でも、また上映当時のアメリカの状況とウォルトらがどのように映画に関わっていたのかについて検証していく。

そもそも、この『シンデレラ』は、『白雪姫』以来十三年ぶりとなるヒロイン映画である。そこでは、もちろん社会状況も異なってくる。当時のアメリカの特徴として三点挙げられる。

第一に、1950 年は、第二次世界大戦が終わり、軍需特需によって景気が上昇していたことである。同年代には国民の約 60%が中産階級の生活水準に到達したといわれている⁽²⁶⁾。不況・戦争状態から脱して間もない頃だったので、まだ暗い時代の頃の印象は当時のアメリカ国民にとって強く残っていた。

第二に、戦時中、男性が外地に出征している間、女性も軍需工場や病院に数多く動員された。このとき、多くの女性が労働というものを経験し、男性には頼らない強い女性へと変わった(目指した)のである。有馬哲夫氏の著書にも書いてあったことだが、リベット工のロージーの有名なポスターは、当時の(動員のためのプロパガンダともなったであろうが、)女性の意気込みを語っている⁽²⁷⁾。



第三に、結婚ブームであったことである。世界大戦の最中、男性は戦地に赴いており、アメリカにはいなかった。その男性が戦後、アメリカに帰国したのであるから、未婚の女性にとっては、結婚相手を見つける機会が増えたということになり、結婚ブームといっても過言ではない状況にあったと推測できる(28)。

以上のように、戦争が終わり、アメリカは経済大国としての地位を固め、国内ではこれまで労働に従事してきた女性が男性と結婚し家庭を築き始める時期にあったのである。

では、ウォルトは、どうだったろうか。注目したい点が六つある。

第一に、映画『シンデレラ』にかける情熱が、大きかったことである。第二次世界大戦によって、ウォルトらのスタジオの人員も減り、スタッフの士気も下がり、経営難に陥っていた。白雪姫以来ウォルトにとっては、最もリスクな映画であった。また、スタッフの熱も冷めており、誰も成功するとは考えていなかったのである(29)。そのような状況下で、この『シンデレラ』は、スタジオの再起をかけて望んだ映画なのである。

第二に、この映画でも、男性登場人物の存在が薄いことである。父親は物語の冒頭で死んでしまい、王子も舞踏会とエンディングにしか出てこない。唯一男性登場人物で話す回数の多いのは、王さまと大公である。しかし、彼らの登場シーンも多いとは言えない。ディズニー映画では、シンデレラ、継母と継娘たちや小動物たちのシーンがかなりの時間を占める。ディズニー映画『白雪姫』と同じように、ヒロインを美し

く描くことに重点が置かれ、王子の影は薄く、名前も「プリンス・チャーミング」とあまり知られないほど、印象が薄い(30)。

第三に、誰が見てもわかりやすい映画にしたことである。ペロー童話『サンドリヨン、あるいは、小さなガラスの靴』で、継娘たちの容姿は直接描かれてはいなかったが、ディズニー映画の方では見るからに醜く描かれている。また、歌を歌うシーンでも音痴に描かれているなど、シンデレラの美しさが余計に目立つようになっている。また、舞踏会の回数を一回にしたり、継娘たちの(シンデレラが王子と結婚した)その後のことを描かなかったりしたことで、何故虐めていた人を許すのかなど観客に疑問を抱かせないようにして、観やすくさせている。そして、焦点がシンデレラを中心に描くことで、エンディングはシンデレラの優しい性格よりも、王子と結婚したという事実(ハッピーエンド)が強調されている。

第四に、小動物たちのシーンを数多く出していることである。これは、ディズニー映画『白雪姫』以上である。しかもネズミたちは会話をし、服を着ているのであるから、小動物を擬人化して、準主役のである。動物たちと言えば、継母の飼い猫ルシファーが出てくるが、猫とネズミは強弱関係にある。シンデレラを始め、人間の間関係を整理してみると、「継母・継娘たち(猫) シンデレラ(ネズミ)」となる。これは、それぞれの強弱関係に呼応している人間界の強弱関係を動物たちにも持ち込むことで、対立構図が子どもにもわかりやすい内容となるのである。

第五に、シンデレラを従来ヒロインとは違った趣で描いていることである。白雪姫の場合、強いお妃に対して、反抗することはなかった。しかし、シンデレラの場合、王宮からの舞踏会の招待の際に、舞踏会には行けないと嘲笑した(継母と)継娘たちに面と向かってこう反論している。

ディズニー映画『シンデレラ』

Well, why not? After all, I'm still a member of the family. And it says, "by royal command, every eligible maiden is to attend". (なぜ、いけないの? 私だって、まだこの家の一員ですわ(原文ママ)。それに手紙には、「王様の命令により、年頃の娘は全員出席のこと」とあるのですから。)

ペロー童話『サンドリヨン、あるいは、小さなガラスの靴』

(継姉に舞踏会に行きたいかと意地悪に質問されたのに対して、サンドリヨン)
「まあ、お嬢様、からかっていらっしゃるんでしょう、私なんかが行く所じゃありませんのに。」

と、原作ペロ－童話では、反論することなく、行きたい気持ちを抑えて自嘲しているのに対して、ディズニー映画では、しっかりと理由まで述べて反論しているのである。これまで、召使いのように働きながら文句を言わないできたシンデレラが、舞踏会のこととなると、反論したのである。映画の中を通していても、唯一舞踏会関連のことで、継母たちと対峙している。

第六に、ウォルトはライブアクションを重視していたことである。『白雪姫』でも、実際に人が白雪姫の衣装を着て踊るといったシミュレーションがあったが、ウォルトら制作側は、ライブアクションを重用した。この、ライブアクションを用いることで、アニメといえども、本当に人が動いているかのように、柔らかい身のこなし方や不自然な動きがなく、まるで実写映画を観ているような感じにさせる。そして、この映画もカラーで出来ており、色鮮やかな映像となっている。

以上のように、当時のアメリカの社会状況と、ウォルトらの関係を検証してきたが、ディズニー映画『白雪姫』同様に、こちらにもアメリカの要素が詰まった映画に様変わりしている。第二次世界大戦後、男性の帰還に伴い、これまで労働に従事してきた独身女性（特に年頃の独身女性）にとっては、結婚相手を探す絶好の機会にあった。家計が傾き、自らは召使い同然に扱われていたシンデレラが、舞踏会の後には、王子の妃になるという、地位のかなりの急上昇である。ちなみに、王子は、どこからか帰国することとなっており、若い男性が帰国するという当時のアメリカと同じである。王宮に憧れていたシンデレラが小動物や妖精の助けを借りながらも、王子との結婚に向けて努力する新しいヒロインが誕生したのである。有馬氏曰く、それは奮闘努力によって富と力を得るというホレイショ・アルジャー（十九世紀末アメリカで人気を博した少年少女向けの成功物語）の女性版である（31）。

また、経済的にも潤ってきた中で、カラーで、再びおとぎ話から魔法や舞踏会など少し現実から離れた要素を持つてくることは、戦争というつらい経験をし、戦時中の閉塞した社会を生きてきたアメリカ人の目に華やかに映させた。

ただし、注意しておきたい点が二つある。

第一に、新しいヒロイン像といっても、依然として夢を見る女性に変わりはないということである。

ディズニー映画

Whatever you wish for, you keep (どんな願い事でも ずっと)

Have faith in your dreams and someday (自分の夢を信じつづけていれば いつか)

Your rainbow will come smiling through (虹が訪れ微笑みかけてくれる)

No matter how your heart is grieving (どんなに心が悲しみでいっぱいでも)

If you keep on believing (信じつづければ)

The dream that you wish will come true (夢はきっとかなうはず)

上述した歌からわかるように、夢を信じていればきっとかなう、という希望的観測が強い。この歌は、シンデレラと王子が馬車に乗りキスを交わすエンディングでも流れている。確かに、夢に向かって努力するヒロイン像は新しいかもしれないが、この歌が最初と最後にあるように、この映画の秘められた主題は「夢」であり、現実的な志向ではない。

第二に、王様の結婚に対する考え方が、独特(というよりも世代が上に感じられる)であることである。大公と舞踏会を催すことを決める際に、以下の発言をしている。

ディズニー映画

My son has been avoiding his responsibilities long enough. It's high time he married and settled down. (息子は長いこと王子としての責任を回避しておる。もう結婚して落ち着いてもいい頃だ。)

I want to see my grandchildren before I go. (死ぬまえに孫の顔が見たいのだ。)

Love? Hah! Just a boy meeting a girl under the right conditions. (恋愛だと? ふん! 単にふさわしい場で、若い男女が出会うだけだろう。)

王子であるという立場も考慮にいれなければならないが、王様は結婚とは義務と考えている。そして、結婚をすることで、家庭を持って夫婦仲良く暮らすということよりも孫の誕生を、王様は強く望んでいるのである。また、恋愛のことを軽視する発言

もしている。シンデレラと王子が恋愛に浸る中で、王様はどちらかという王子が結婚さえすればいいという考え方に近い。王様の存在意義は、「王様（古い世代）から王子（新しい世代）へ」といったような世代交代の対象となるとともに、新しい時代の幕開けとなることを予期させることに繋がっているのである。

3 地味なラブストーリー『眠れる森の美女』

ディズニー映画『シンデレラ』が1950年に公開された九年後の1959年に『眠れる森の美女』は公開された。『白雪姫』、『シンデレラ』、『眠れる森の美女』三作品の中で、最も前作との期間が短い。この短い期間で、アメリカの社会やウォルトらは変化したのだろうか。以下に検証していきたい。

まず、当時のアメリカの特徴として二つ挙げられる。

第一に、保守的な空気が多く漂っていたことである。確かに1950年代は、アメリカにとって、経済繁栄を成し遂げた時期である。しかし、冷戦突入ということもあり、マッカーシズムのような事が起こるなど、思想的不寛容が同時に広まっていた。順応主義（経済的繁栄の中であえて社会の動向に異議を唱えない態度）が浸透して、現状を改革しようとする動きに全て共産主義の烙印を押すなど、保守的で偏狭な価値観が支配的であった。但し、その一方で、こうした閉塞した状態から脱し、時代の変革を求める欲求も強まってきていた。それは、1960年に民主党のジョン・F・ケネディが大統領に当選したことにも表れている（32）。

第二に、女性への価値観も同時に保守的になっていたことである。1959年の頃になると、戦時中に女性も男性に負けないほど労働していたことや生計を立てていたことも昔のことと感ぜられるようになっていた。そして、女性のあるべき姿は主婦であるという圧力も強かったという見解がある。夫が仕事（外）に出かけ、女性は家を守り、子どもを育てること（内）が大切だという社会の風潮が強かったのである。欧米先進諸国や日本などの国も経済成長し始め、世界一を占めていたアメリカの経済的地位も盤石なものではなく、厳しい戦いを強いられていた。そうしているうちに、結婚概念も単に「愛する人と結ばれる」というよりも「沢山の子どもを育て、家事に忙殺される」現実へと変化していたのである（33）。

以上のように、経済大国としてのアメリカに影が少しずつ見え始める時期であり、

女性を取り巻く環境も、再び戦前のような保守化していた。

では、ウォルトらはどうだったのでしょうか。注目したい点が五つある。

第一に、物語の展開をラブストーリーにして、誰が見てもわかりやすい進行にしたことである。百年の眠りや、偶然王子が会うなど、グリム童話にせよ、ペロー童話にせよ、わかりにくい内容であったが、オーロラ姫とフィリップ王子が幼い時から許嫁でありながらも、十六歳ほどの青年になった時に偶然森で会っても自分たちが許嫁であることを知らないで恋に落ちるなど、一般的なラブストーリーとなっている。また、百年の眠りのように物理的に疑問が呈される箇所も、ディズニー映画ではまるで一日ぐらいしか寝ていないような描かれ方になっている。そのようにすることで、誰が見ても違和感のない現在進行形の展開となっているのである。

第二に、男性登場人物を『白雪姫』や『シンデレラ』以上に際立たせたことである。前二作の王子は存在も薄かったが、『眠れる森の美女』ではオーロラ姫を救うために、ドラゴンと戦うなど勇敢に描かれている。名前も「フィリップ」とよく用いられる名前が使われていて、人間味も増している。『眠れる森の美女』では、ヒロインが眠ってしまうため、代わりにヒーローの活躍場面が必然的に増えることとなる。また、オーロラ姫の父王も妻子を守る威厳のある父親として登場している。

第三に、色を登場人物たちの立場で明確に分けたことである。前述したように、誰が見てもわかりやすいように構成されているのだから、色の違いもそれに一役買っている。つまり、オーロラ姫たち（善）は赤や青など色鮮やかであるが、それに対する悪い妖精マレフィセント（悪）の色は黒を中心としている。ここでも、『白雪姫』や『シンデレラ』と同様に、「善」と「悪」といったアレゴリーを明確に区分することで、対立構図がわかりやすくなっている。

第四に、この映画では、登場人物や小動物たちの表現よりも背景画面が重要になっているということである。ウォルト自身、作品の制作に入ると、ゴシック式の鋭角的で垂直の線を強調したお城や風景をいたく気に入っており、背景専門のアイヴィンド・アールを重用し、今までのディズニースタイルとは違うお城と風景を描くようにさせた。アールも背景が登場人物や小動物たちの添え物として背景を描くことに不満を感じており、ウォルトの重用もあり、背景をやたら目立たせる方向に走った。つまり、登場人物の動きを中心に考えて背景が決められていくという手順ではなく、「背景ありき」の進行になっていたのである（34）。上述した特徴のある背景を希望していた

ウォルトと背景を主役にしたかったアールの利害が一致したのが、この映画での独特な（風景が独立しているような）描かれ方という結果に出たのである。

第五に、1955年に巨大テーマパーク、ディズニーランドが開園したことである。もちろん、この開園計画には、建設段階からウォルトは関わっている。ウォルトは建設に夢中になるとともに、当時新しい電子媒体であったテレビにも積極的に登場し、ディズニーランドの建設資金調達などを目的に行動していた。当時、他の映画プロデューサーがテレビを映画館から客を遠のかせてしまう危険性のある「怪物」と呼んでいたのに対し、ウォルトはその逆手を取り、有効活用したのである⁽³⁵⁾。しかし、その一方で、『眠れる森の美女』の制作にはあまり関わらなかった。だからこそ、『白雪姫』や『シンデレラ』に登場する人物には個性が欠け、地味なラブストーリーになってしまった⁽³⁶⁾。

以上のように、『白雪姫』『シンデレラ』を含めた三作品の中で、最もプリンスとプリンセスが同等の主役として扱われ、よくあるラブストーリーな展開へと変化は起こった。けれども、ディズニーランド建設やテレビ出演などの影響もあり、ウォルト自身が映画製作にあまり関わっておらず、それが背景を主役に立てたいアールの台頭にも繋がり、ウォルトの個性の薄い、他の作品と似たような映画となってしまったのである。そのためか、この『眠れる森の美女』は、三作品の中で興行収入が悪い。それは、映画そのものの内容もあっただろうが、有馬氏の指摘通り、テレビという電子媒体の影響もある⁽³⁷⁾。『シンデレラ』が上映された1950年での、テレビの家庭普及率は9%だったが、1959年になると85.9%にまで昇った。そうすると、観客は映画館に行くという娯楽を楽しまずとも、新しい電子媒体で娯楽を楽しむようになっており、映画館への足も自然と遠のいていってしまったのである。映像自体は、高い技術を誇っていたけれども、映画からテレビへという時代の潮流には逆らえなかったのである。

さらに、『シンデレラ』で能動的なプリンセスが誕生したが、『眠れる森の美女』では、再び王子が来るのを待つといった受動的なプリンセスへと逆戻りしてしまった。これは、時代の風潮が再び保守化してしまい、男性からの女性観も再び「内」にいる考え方が主流になってしまったことが影響している。しかし、ケネディ大統領出身でもわかるように、女性たちの中にも保守的な考えに反発する人もおり、そのこともこの映画への道を遠のかせてしまったと推測できる。

4 小括

以上、三作品を見てきたが、確かにどの作品も、上映当時の世相を反映した作品となっている。

特に、女性観も「受動的(白雪姫) 能動的(シンデレラ) 受動的(オーロラ姫)」と変遷している。なぜ、このように時代と合った女性像が描けたのであろうか。それは、スタジオ構成にある。ディズニースタジオで初めて女性の脚本家を採用されたのは、1991年上映の『美女と野獣』である。ウォルトが仕切っていた頃は、男性しかいない⁽³⁸⁾。だからこそ、必然的に当時の男性がどのように女性を見ているかということが、直接映画に出てしまうのである。ただ、フェミニストが批判するほど、当時の制作者側が意図的に強くそういった女性像を描いていたわけではなく、無意識のうちに描いてしまっていたのである。なぜなら、フェミニストたちが主張するような意見は当時のアメリカではまだ流布しておらず、逆に社会で考えられている女性像が一般的であり、その考え方を共有していたからである。

そして、三作品ともおとぎ話を原作にしており、おとぎ話の内容を知っている観客からすれば、新たにカラー映像として映し出されることに関心が及ぶ。その上で、童話の複雑さや残酷さをなくして、誰が見てもわかりやすいように構成を練り、色や小動物たちを巧みに使って役の立場をわかりやすい斬新な映画にしたのである。そして、実写さながらの動きを出すことで、アメリカ・アニメ映画の質を上げ、観客の関心を引かせた。まさに、ディズニー・マジックによって、単なるおとぎ話が、ドラマ的な展開を持ち、当時最新の技術が集まった映画へと変身したのである。しかし、その技術的な先駆も1950年代後半にもなると、見慣れてきた観客が段々と映画館から姿を消し、段々と陰りを見せ始めてしまったのである。

ディズニー・マジックのその後

1 ディズニー・マジックがもたらす弊害

ディズニー・マジックは当時に限らず、今もなお観客を魅了している。それは、これらのディズニー映画が本当の(元来の)おとぎ話だと思っている人が多いことにも

表れているだろう。

しかし、このディズニー・マジックはディズニー映画の長所であると同時に、唯一の欠点ともなっている。それは、人々から考える機会を奪っていることである。

つまり、物語の深化を妨げているのである。元来のおとぎ話が、その話を通して本当に伝えたかったことはどういうことなのか、ペロ－童話にも物語の最後に教訓が載っているように、教育的な意味合いがあったと推測できる。ディズニー映画では、そういった教訓内容は姿を消し、全てラブストーリーの内容へと変化してしまった。ヒロインたちは、「夢を信じていれば、いつか叶う」という共通意識を持って、どことなく理想的である。その内容が当たり前と考えるようになる流れが出てきており、ウォルト死後の『リトル・マーメイド』（1989年）や『美女と野獣』にも表れているように、ヒーローとヒロインによるラブロマンスの展開となる映画が多数を占めている。

ディズニー・マジックは、上映当時は斬新さを与える役割を担ったが、それは同時に観客から本来そのおとぎ話が持つ意味合いを考える機会を失わせ、おとぎ話自体の存在をも薄くさせ、さらには、その後ディズニー社が作る映画をラブストーリーへと運ばせる呪縛ともなってしまったのである。

2 日本でのディズニー映画の上映とその影響

ディズニーが、世界初の長編カラー・アニメ映画『白雪姫』をアメリカで公開したのは、1937年のことであるが、日本で公開されたのは1950年であった。1950年といえば、日本では、まだカラー映画は主流ではなかったし、長編カラーで成り立つアニメ映画もまだ出現していなかった。日本で初の長編カラー・アニメ映画は1958年に公開された『白蛇伝』である。約二十年も前に、アメリカではその技術を持っていたということになる。

1950年に日本で公開されたディズニー映画『白雪姫』は、当時の日本のアニメ映画界で大きな影響を及ぼした。なぜなら、『白蛇伝』ではディズニースタジオが用いた技術を殆ど用いているからである。

それまで少数スタッフの個人的プロダクションにすぎなかった日本のアニメ制作は、初めてディズニー式の工場生産方式と数百人のスタッフを持つ撮影所に移行することになったのである⁽³⁹⁾。そして、ライブアクションという手法を使って、アニメの中

で登場人物たちの動作を実写のように描き上げたのである。純愛物語にふさわしい美しい彩色、なめらかな動き、長編らしい悠揚とした構成、ところどころに挿入された現代風のアイデアとウイットなど、ディズニーに比べても遜色のない出来映えとなっていたのである(40)。

この『白蛇伝』の完成は、二つの意味合いを持っていた。一つは、世界中のアニメ映画は、もはやディズニー映画が独占するものでは無くなってきたということである。二つ目は、ディズニー映画の持っていた技術を、日本のアニメ映画界はこの時点で消化してしまったことである。『白蛇伝』は、わずか八ヶ月でディズニー映画と同じ手法で作られられたのである。この時から、日本のアニメも世界へ進出できる土壌が出来上がり始めていたのである。そして、1958年には、『鉄腕アトム』などで有名な手塚治虫がアニメ進出を目指して手塚プロ動画部を設立した。彼は、ディズニー・アニメに傾倒し、『白雪姫』を50回以上も見たのである(41)。

以上のように、日本でのディズニー映画は、戦後日本のアニメ界に大きな影響を及ぼしていた。今日、日本のアニメは世界でも大きく報道され有名になってきているが、その原点は、1950年に日本で公開されたディズニー映画『白雪姫』であった。その技術を日本のアニメ界が習得したことで、今日のアニメ界の発展へと繋がっていったのである。

おわりに

ディズニー映画に代表される三作品を見てきたが、どの作品もアメリカ風に置き換えられていた。しかし、ヨーロッパ原産のおとぎ話をそのまま上映していたとしたら、ここまで人気を博していたとも考えにくい。

ウォルトの斬新なアイデアが、今もなお人気を博す要因となったのである。

戦後の日本でも、アメリカ志向(西洋への憧れ)が強かったり、映画に見る真新しさや日本人に共感できる箇所があったりしたからこそ、特に子どもを中心にここまでディズニー映画が人気を保っているのである。『白雪姫』や『シンデレラ』に代表されるような継子いじめ物語は、古くは落窪物語に見ることができ、虐げられるヒロインが幸福となり、さらには位が時期王妃となるサクセスストーリーに憧れを抱く人もいたのかもしれない。だからこそ、「シンデレラ・ストーリー」といったような造語が生

まれているである。

アメリカ並びに世界のアニメ界に旋風を巻き起こしたウォルトも 1966 年に死去する。その後は、ディズニー映画の手法も異なってきた。つまり、ウォルトが中心となっていた頃は、先に登場人物たちの動作があり、その後にストーリー（物語の流れ）が決められていた。しかし、ウォルト亡き後は、特に『美女と野獣』では、先にシナリオがあり、それに合わせた登場人物たちの動作が付くという感じで、シナリオの位置づけが異なる。

今回は、ウォルトを中心に『白雪姫』、『シンデレラ』、『眠れる森の美女』の映画を検証してきたが、ウォルトの次の体制（マイケル・アイズナー体制）での制作手法でもこの三作品のように、アメリカの社会状況や制作者側の意図が何らかの関係しているのか今後機会があれば考察していきたい。

*注

(1) 奥村みさ / スーザン・K・バートン / 板倉巖一 著 『映画でわかるアメリカ文化入門』(松柏社、2007 年) 参照。

(2) 映画の上映年や見出し画は、各々以下の HP による(2011 年 1 月 31 日現在)。

<http://disney.go.com/vault/archives/characters/snow/snow.html>(『白雪姫と七人の小人』)

<http://disney.go.com/vault/archives/characters/cinderella/cinderella.html>(『シンデレラ』)

<http://disney.go.com/vault/archives/characters/sleeping/sleeping.html>(『眠れる森の美女』)

(3) 以下、原文はグリム兄弟著、塚越敏訳 『白雪姫 - グリム童話集(下)』(旺文社文庫、1982 年) による。

(4) 以下、台本は、藤田英時編 『名作アニメで英会話シリーズ 3 白雪姫』(宝島社、2008 年) による。

(5) 片木智年 『少女が知ってはいけないこと 神話とおとぎ話に描かれた<女性>の歴史』(PHP 研究所、2008 年、58 頁) 参照。

(6) 桜澤麻衣著、三浦佑之監修 『本当は怖い世界の童話』(G.B.、2007 年、21 頁) 参照。

- (7) 有馬哲夫『ディズニーの魔法』(新潮新書、2009年、27頁)参照。
- (8) 以下、原文はシャルル・ペロー著、今野一雄訳『ペローの昔ばなし』(白水社、2007年)による。
- (9) 以下、台本は、杉原葉子『みるみる上達名作アニメで英会話 シンデレラ』(コスミック出版、2008年)による。
- (10) 片木智年『少女が知ってはいけないこと 神話とおとぎ話に描かれる<女性>の歴史』(PHP、2008年、54-55頁)参照。
- (11) 片木智年『ペロー童話のヒロインたち』(せりか書房、1996年、31頁)参照。
- (12) 以下、原文は、野村滋訳『決定版 完訳 グリム童話集 二』(筑摩書房、1999年)参照。
- (13) さらに、『最強のクリエイティブ集団 ディズニー完全読本。』(pen、阪急コミュニケーションズ、2010年、50頁)には、原作はシャルル・ペローと書かれている。
- (14) 以下、原文は、グリム兄弟著、塚越敏訳『白雪姫 - グリム童話集(下)』(旺文社文庫、1982年)による。
- (15) 以下、台本は、DVD『眠れる森の美女 (SLEEPING BEAUTY 50TH ANNIVERSARY 2-DISC PLATINUM EDITION)』(ウォルト ディズニー スタジオ ホーム エンターテイメント)による。
- (16) 図録 失業率(日本と主要国)
http://wrs.search.yahoo.co.jp/_ylt=A3xTxgqnoklNmHAAD0CDTwx.;_ylu=X3oDMTBtdmgwdDljBHBvcwM3BHNIYwNzcgRzbGsDdGl0bGU-/SIG=11sei5tvf/EXP=1296772199/**http%3A//www2.ttcn.ne.jp/honkawa/3080.html
- (17) 鈴木透『実権国家アメリカの履歴書 社会・文化・歴史にみる統合と多元化の軌跡』(慶應義塾大学出版会、2003年、111-124頁)参照。
- (18) 同上(131頁)参照。
- (19) グリーン夫妻著、山口和代訳『魔法の仕掛人 ウォルト・ディズニー』(ほるぷ出版、1994年、161頁)参照。
- (20) 鈴木満『図解雑学 グリム童話』(ナツメ社、2005年、126頁)参照。
- (21) 『最強のクリエイティブ集団 ディズニー完全読本。』(pen、阪急コミュニケーションズ、2010年、86頁)参照。
- (22) おかだえみこ『ディズニー、手塚からジブリ、ピクサーへ 歴史をつくったア

ニメ・キャラクターたち』(キネマ旬報社、2006年、6頁)参照。

(23) 有馬哲夫『ディズニーの魔法』(新潮新書、2009年、37-40頁)参照。

(24) おかだえみこ『ディズニー、手塚からジブリ、ピクサーへ 歴史をつくったアニメ・キャラクターたち』(キネマ旬報社、2006年、5頁)参照。

(25) 有馬哲夫『ディズニーの魔法』(新潮新書、2009年、41-43頁)、グリーン夫妻著、山口和代訳『魔法の仕掛人 ウォルト・ディズニー』(ほるぷ出版、1994年、161頁)、『最強のクリエイティブ集団 ディズニー完全読本。』(pen、阪急コミュニケーションズ、2010年、44-45頁)参照。

(26) 鈴木透『実権国家アメリカの履歴書 社会・文化・歴史にみる統合と多元化の軌跡』(慶應義塾大学出版会、2003年、136頁)参照。

(27) オールポスターズの私たちにもできる リベット工ロージーポスター J・ワード・ミラー

http://wrs.search.yahoo.co.jp/_ylt=A3xTxksK1E5NSIsAgg6DTwx.;_ylu=X3oDMTBtdTY1Z3BjBHBvcwMyBHNIYwNzcgRzbGsDdG10bGU-/SIG=1a9ecqs1u/EXP=1297112522/**http%3A//www.allposters.co.jp/-sp/%25E7%25A7%2581%25E3%2581%259F%25E3%2581%25A1%25E3%2581%25AB%25E3%2582%2582%25E3%2581%25A7%25E3%2581%258D%25E3%2582%258B-%25E3%2583%25AA%25E3%2583%2599%25E3%2583%2583%25E3%2583%2588%25E5%25B7%25A5%25E3%2583%25AD%25E3%2583%25BC%25E3%2582%25B8%25E3%2583%25BC-Posters_i309419_.htm

(28) 有馬哲夫『ディズニーとは何か』(NTT出版、2001年、172-173頁)参照。

(29) 『最強のクリエイティブ集団 ディズニー完全読本。』(pen、阪急コミュニケーションズ、2010年、50頁)、Michael Barrier, "The Animated Man- A LIFE OF WALT DISNEY", *Berkeley, Calif: University of California Press*, 2007 (106頁)参照。

(30) 『最強のクリエイティブ集団 ディズニー完全読本。』(pen、阪急コミュニケーションズ、2010年、86頁)参照。

(31) 有馬哲夫『ディズニーとは何か』(NTT出版、2001年、165頁)参照。

(32) 鈴木透『実権国家アメリカの履歴書 社会・文化・歴史にみる統合と多元化の軌跡』(慶應義塾大学出版会、2003年、133-142頁)参照。

(33) 有馬哲夫『ディズニーとは何か』(NTT出版、2001年、174-175頁)参照。

- (34) 有馬哲夫 『ディズニーの魔法』(新潮新書、2009年、133-134頁) 参照。
- (35) グリーン夫妻著、山口和代訳 『魔法の仕掛人 ウォルト・ディズニー』(ほるぷ出版、1994年、241-243頁) 参照。
- (36) Michael Barrier, “The Animated Man- A LIFE OF WALT DISNEY”, *Berkeley, Calif: University of California Press, 2007* (271頁) 参照。
- (37) 有馬哲夫 『ディズニーの魔法』(新潮新書、2009年、136-137頁) 参照。
- (38) 藤森かよこ 「ディズニー映画に見るジェンダー 『可愛いお嫁さん』志望から『過労キャリアウーマン』へ、そしてロリコン」(『AERA Mook - アメリカ映画がわかる』、朝日新聞社、2003年、80-84頁) 参照。
- (39) 山田和夫 『日本映画 101年 未来への挑戦』(新日本出版社、1997年、178頁) 参照。
- (40) 今村太平 『漫画映画論』(岩波書店、1992年、209頁) 参照。
- (41) 山田和夫 『日本映画 101年 未来への挑戦』(新日本出版社、1997年、178頁) 参照。

参考文献

- Barrier, Michael . “The Animated Man- A LIFE OF WALT DISNEY.” *Berkeley, Calif: University of California Press, 2007.*
- 秋元英一 『世界大恐慌』(講談社、2009年)
- 有馬哲夫 『ディズニーとは何か』(NTT出版、2001年)
- 同上 『ディズニーの魔法』(新潮新書、2009年)
- 今村太平 『漫画映画論』(岩波書店、1992年)
- おかだえみこ 『ディズニー、手塚からジブリ、ピクサーへ 歴史をつくったアニメ・キャラクターたち』(キネマ旬報社、2006年)
- 奥村みさ / スーザン・K・バートン / 板倉巖一郎著 『映画でわかるアメリカ文化入門』(松柏社、2007年)
- 片木智年 『少女が知ってはいけないこと 神話とおとぎ話に描かれる <女性> の歴史』(PHP、2008年)
- 同上 『ペロー童話のヒロインたち』(せりか書房、1996年)
- グリム兄弟著、塚越敏訳 『白雪姫 - グリム童話集(下)』(旺文社文庫、1982年)

グリーン夫妻著、山口和代訳『魔法の仕掛人 ウォルト・ディズニー』（ほるぷ出版、1994年）

桜澤麻衣著、三浦佑之監修『本当は怖い世界の童話』（G.B.、2007年）

シャルル・ペロー著、今野一雄訳『ペローの昔ばなし』（白水社、2007年）

杉原葉子『みるみる上達名作アニメで英会話 シンデレラ』（コスミック出版、2008年）

鈴木透『実権国家アメリカの履歴書 社会・文化・歴史にみる統合と多元化の軌跡』（慶應義塾大学出版会、2003年）

鈴木満『図解雑学 グリム童話』（ナツメ社、2005年）

野村滋訳『決定版 完訳 グリム童話集 二』（筑摩書房、1999年）

藤田英時編『名作アニメで英会話シリーズ3 白雪姫』（宝島社、2008年）

藤森かよこ「ディズニー映画に見るジェンダー 『可愛いお嫁さん』志望から『過労キャリアウーマン』へ、そしてロリコン」（『AERA Mook - アメリカ映画がわかる』、朝日新聞社、2003年）

山田和夫『日本映画 101年 未来への挑戦』（新日本出版社、1997年）

『最強のクリエイティブ集団 ディズニー完全読本。』（pen、阪急コミュニケーションズ、2010年）

DVD『眠れる森の美女（SLEEPING BEAUTY 50TH ANNIVERSARY 2-DISC PLATINUM EDITION）』（ウォルト ディズニー スタジオ ホーム エンターテイメント）